

## Prof. A. Hill Returns

## Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

## Season 2, Episode 5



前号で走る話を書いた。それから幾歳月、ってそんなに時間は経っていないが、その後益々のめりこみ、なんと皆さん遂にフルマラソンを走るようになりました。普段の練習も10km～22km走る。200mで呼吸困難になっていた最初の頃からまだ1年半ほどなので我ながら大進化である。これまでにもう3回もフルを走ってしまった。しかも全て完走し、タイムも初回4時間47分、



2回目4時間7分45秒、3回目には驚くなかれ3時間52分7秒。業界で言うところのサブフォー（4時間を切ること）を早くも達成という快挙。自慢しているように聞こえるかも知れないが、はい自慢しています。子供時代は運動神経が無いと言われ（昔はそういう言い方をした。無かったら死ぬがな）運動会の日に雨が降ることを念じていた私である（運動は嫌いではなかったが、鈍くさいから周りに迷惑をかけ、それが嫌だった）。ブキヨーでもひたすら走るだけなら人並みにできることに生まれて半世紀してから漸く気付き、しかもあの辛い42.195km（ほんまにしんどい）を走れるようになったのだから自慢させて下さい。最初の大会に出る前は完走は絶対無理って思っていた。だって世界最初の出場選手（マラトンの戦いの勝利を知らせるべく走ったエウクレス）は、走り終わって死んじゃったんですよ。いや～新学術領域研究の領域代表になるより百万倍嬉しいっす。小学校の徒競走も40kmあったら良かったのになあ。

第23回加古川マラソン(陸連公認コース)のゴール間近を走るA. Hill。顔にモザイクが入っているのはA. Hillの正体が会計検査院にばれないようにするためと、息も絶え絶えで顔がマイケルのスリラーのバックダンサー状態になって見苦しいため。この衣装を見てN. Akan先生が「そら変質者と間違えられるで」（前号参照）と言われたが、マラソン大会では宇宙柄（星雲や土星とかが散りばめられている）のタイツ穿いたおじいさんや化粧した筋肉むきむきへん出しルックのおかまの方（これが結構速い）もいるので、私なんかごく普通です。面白いのは実力によってカッコが違ふこと。サブスリー級の人達はもっと薄着。ランニングとランパン（ランニングパンツ）だけ等。



いつものことで熱中し始めると、凝ってしまう。ランニングは安上がりだと始めたのに、ウェアやらGPS付き腕時計やらサングラスやら色々買いたくなる。シューズも練習用2足とレース用1足。市民ランナーの集まり（阪神電車で唯一橋上に駅舎がある駅と同名の今年30周年を迎える歴史あるクラブ）にも入れて頂いた。私より年齢が上の人も多く、67歳でウルトラマラソン（100km!!）に何回も出ている人、マラソンを既に200回走った人等々猛者ばかりで圧倒される。ソレキは何年ですかとよく聞かれて、なんのことも最初ピンと来なかったが走歴だった…。そういう世界。私なんか2年にも満たないひよっこ（あひるのこ）だ。でもクラブの皆さんは私のような初心者にも優しく、走った後によく頑張った強かったと褒めて貰えるのが、芥川賞を受賞したTomogui氏（記者会見笑えたなあ）と同じくらいひねくれている私でも素直に嬉しい（最近、無名チームが箱根駅伝に出るというストーリーの映画「風が強く吹いている」を見ていたら、主人公がもう一人の主人公に長距離選手に対する最高の褒め言葉はなんだと思うって聞き、「やっぱり、早いですか」って答えたなら「いや、強い、だと思ろ。」って返すシーンがあった。それでさらに嬉しくなった）。会員の職業も様々で、



三浦しをんの小説が原作。映画としては普通の出来だが、自分が走っていると感涙間違い無し。主人公のカケル役的林遣都は、ランナー役があまりにどんぴしゃ。ソフトバンクの白土家の兄さんも走ってます。

街場の文房具会社の社長さん、歯医者さん、会社勤めの人、不動産屋さん、銀行屋さん、税務署屋(?)さんなどなど、そういう人達と走った後にビール（走った後って何であんなビールが美味しいのだろう。普段はワインか日本酒が多いけれど、走り後はビールに限る）を飲みながら話すのが底抜けに楽しい。科学予算は今後削減されるのかといった話題にならないしね。

## Prof. A.Hillの帰還とロジ裏生活

クラブでは、夜6時から朝6時までチームで交替しながら夜を徹して走り続けるという大会もあり、なんでまたそんな辛いことをわざわざと思ったが、参加してみるとこれが盛り上がる。最後にチーム全員で手を繋いでゴールするときには感動的。クラブに入って、走る仲間がいる楽しさを発見できた。



皆さんも時々街で小さなリュックをしょって走っている人を見かけることがある。それは、職場と家の往復に着替えを持って走る通勤ランの人かもしれない。そういう人が結構いるようだ。私は大学と家が近すぎて練習にならないので通勤ランはしていないが（自転車通勤。しかも電動機付き。40km走れても、自転車を漕ぐのは嫌い）、一回リュック担いで走って見たかったので大学から天満宮近くにある馴染みの居酒屋まで着替えを持って走って見た（こういうのは何と呼べばいいの。酒ラン?）。16km。距離は全然問題無い。途中から土砂降りになり、びしょ濡れになったこともまあいい。だが自分が方向音痴なことを忘れていた。道の入り組んだ街なかだったので、迷子になってしまった。どっちに行ったらいいのかわからず、住宅街や工場街をあっちに走りこっちに走り。リュックしょって短パン



穿いたおじさんが彷徨っていたら、裸の大将・山下清ではないか。警察に突き出される恐れもある（前回書いた変質者事件と謂い、ランニングというのは社会的生命を賭けた趣味といえる）。もう必死。iPhoneのGPS機能を使ってようやく淀川に辿り着き長柄橋を渡った。橋の上から対岸の街が見えて来たときは、「翼よ、あれが天神橋筋の灯だ（©リンドバーグ）」と思わず叫びそうになった。



さて、居酒屋に行く前に汗を流し着替えねばならない。なにしろ行きつけのその店は、世界一と認定された正統派居酒屋だ（A.Hill教授認定。近いうちにモンドセレクションでも認定されるかも。店の名前は

PUFFYの左のほうの名字と同じ。Perfumeじゃないよ。その彼女は私と同じで左利きである。関係無いけど）。だから山下清状態で入るわけにはいかない。そこで当初の計画通りネットで調べておいた南森町の銭湯・紅梅温泉に向かった。ここがめっけもんだった。もちろんスーパー銭湯ではない。昔ながらの銭湯で、スーパージェッターが腕時計のボタン押しっぱなしにしてるんちゃうかと思うくらい（すいません、時間が止まっているという意味です。図参照）完璧なretrospective銭湯。靴入れの木札の鍵持って入るとちゃんとおばちゃん



「僕は1千年の未来から時の流れを超えてやってきた。流星号応答せよ。来たな、流星！」で始まるテレビアニメ・スーパージェッター。駄菓子屋で買ったスーパージェッターの腕時計で、私たちはよく流星号を呼んだものだ。この時計はトランシーバー機能だけではなく、スイッチを押すと周りの時間が止まってその間ジェッターは自由に動けるという誠に都合の良い機能付き。でも30秒しか持たない。なので銭湯を昔のままにはしておけない、本当は、流星号のプラモデル（右）も持っていた。マッハ15のスピードが出て、呼ぶと犬みたいにすっとなでくる（アニメの中では）。もしかしら主題歌の一番今でも全部歌えるかも。しかし、千年先にこんな服着てたら情けないな…

いる番台があって、ちゃんとタイル張りの洗い場には懐かしの電気風呂もちゃんとありおじいちゃんが痺れている（あれってかなり気色悪い感覚だけどね。漏電みたいなものですよ）。極めつけは、黄色いアヒルみたいなケロリンの洗面器。銭湯はこうこなくっちゃ。ラストサムライで渡辺謙が討ち死にするときと同じ気分。このケロリンのフロントが好きだ。洗い場にはじいさんが多い。ばあさんはいない（あ、男湯だからか）。と思っていたら、3歳くらいの子供



がいて、脱衣場に出てきた私のところにやってきて「フロアガッタ」という。おとうちゃんと間違えてるやろ、と応じたらもう一度「フロアガッタ」と真面目さった顔で言う。確信犯で私に告げているようだが、風呂から上がったことを自慢したいのか、単に宣言しているのか… Wonder Sentou. 身体の芯まで温まっ



## Prof. A. Hillの帰還とロジ裏生活

で気持ちよく外に出てから、どんな飲み物を売っているかチェックするのを忘れていたことに気付く。しまった、これだけの時間流滞スポットならもしかしたら瓶のフルーツ牛乳売ってたかも知れないのに。プラッシーもあったかも。そーいや、プラッシーって昔何故かお米屋さんが配達してた(米って家に配達されてたのだ、昔は)。なんだか薄い味で、子供心に哀愁を感じていたプラッシー、今何処。



風呂でさっぱりして居酒屋に向かう(話の進行がやたら遅い。ジョイスのユリシーズみたい。我が文章も21世紀を代表する文学と言われるようになるかな。ならないな…)。居酒屋「PUFFY左名字」は、カウンター9席しか無い小さな店だが、日本酒の品揃えが超一級で、ありがちな有名な酒は全く無く、あるじ夫婦が各地で見つけてきた旨くち系がこれでもかというくらい並ぶ。私は超辛口より、アミノ酸の旨味がしっかり効いたのが好きなのでこのラインナップは極楽。またこの店でセメシュウにもはまった。セメダイン臭のことで、本当は悪くなった酒を表現するときに使うのだが、ある種の古酒はそれがとても良い感じに出ていて複雑な味わいがある。色々飲んで最後にセメシュウ系を出して貰うのが私の定番で、あるじも良いセメシュウ系を探



す努力をしている。店ではあるじが料理を作り、奥さんがお酒担当。燗にすると美味しいお酒も多く、その燗具合が絶妙。酒のキャラに合わせてぬる燗からやや熱燗まで調節してくれる。しかしふたりとも居酒屋のおやじおかみには全然見えない。二人ともいつも清潔な白いドレスシャツで見かけも喋りも清々しい。このふたりとのやりとりもとても楽しみなのだ。押しつけがましくなく、でも話題も豊富で、聞き上手で自然に会話が弾む。客あしらい、距離の取り方が店の良し悪しを決めるなあとつくづく思う。肴も極上。奇を衒ったものは何も無いが、ひとつひとつ

の材料が吟味されていて丁寧に注意深く料理され、しみじみと味わい深い。客あしらい同様、こういう基本的なことが全てだと再び思う。やはり魚介が最高だが美味しい羊肉があったりもする。珍しい魚もあるけれど、備長炭でじっくり焼いた鯖がスーパーで売ってるのとまるっきり別物で感動的。自家製揚げ出し豆腐最高。うーう、書いていて行きたくなってきた… 酒、肴、人の三拍子がきっちり揃った店を私は他に知らない。それに常連さん達も、穏やかな大人な人ばかり。酒癖の悪い人なんていないし(99%)、相対性理論を熱く語る弁護士事務所の所長さんとか面白い人も多い(一度この所長が部下の美人弁護士を連れてきたときに、私と一緒に飲んでいて我が先輩のM.Kikansha・B研究所所長がすかさず名刺を渡していた。そのボス=おじさんには渡さなかったのに)。この店を知って本当に幸せだ。ひとりで来ることもあれば、大学の仲の良い先生と来ることも。息子二人も何回か連れてきた。一度、ひとり飲んでいたら、長男がひとりで入ってきて驚いた。もちろんお互い来るとは知らなかった。生意気なと思う反面、なかなかやるなとも思った。出来の悪い息子達で心配も多く、愚痴ってはあるじに良い息子さん達ですよと慰められている。あるじは私よりずっと若い、苦勞人なので色々と教えられることが多い。



この店の良さを判ってくれそうな遠来の客を連れて行くこともある。北京・清華大学のReason教授もそう。私より10以上若いのが気が合う。natureに論文を出す一方で、アートやファッションが好きで、アルマーニを着て男性モード誌(中国版Esquire)のグラビアにも登場するぶっ飛び教授だ(研究の世界、特に中国じゃかなり異彩を放っている)。研究だけが人生じゃないという点で意気投合し、彼も私を自分のrole



カフェやバーではなく清華大のReasonの教授室。趣味のパイプやウイスキーが並んでいてやっぱりバー?私の教授室も教授室離れているけれど、負けた。

## Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

modelだと言う(それってやばいんちゃうかと思うけど、転落破滅しても自己責任ですよ。わしゃ知らん)。北京では最先端のアートギャラリー街に連れて行ってくれて、北京がこんなことになっているとは、と驚かされた(もしかしたら東京を凌ぐクールさ)。彼も居酒屋「PUFFY左名字」を気に入り、日本酒をどんどん飲んでた。すると二人連れの女性客が、その人独身?かっこええやん、と話しかけてきた。こういうことはなかなか東京ではありえないかもしれないが、この店では知らない者同士で普通に話が弾む。というようなことがあって、その後かなり経ってから私は今度は東京から来た知り合いの研究者を連れて同店を訪れた。世にも恐ろしいことが待ち受けているとも知らずに。私とその若いPIに、この前この店にReasonを連れてきたら、隣に居た大阪のおばはんが声かけてきてナンパしようとして云々とおもしろおかしく説明していたら、何となくカウンターの向こうのあるじ夫婦の様子がおかしい。必死に私の目を見て何かを伝えようとしている。???何だ何だ?しかし時既に遅く、私のすぐ横から「誰がおばはんやねん」と声が。ひえ〜。失礼いたしました、すぐお隣にいらっしやるとは〜、あわわわわ、である。常連さんだったんですね。考えたら常連の多い店なのだから、当然あり得る。しかしよりによってこの日に私のすぐ横にいても。しかもよくよく見ればおばはんと言うにはかなりお若い。ごごごめんなさい、この前は遠くでよく見えていませんでした。A.Hill一生の不覚(が実に多いが)。平身低頭してお酒を奢って、最後には何とか許して貰いました。大阪人らしい、さばさばした度量の大きい人で良かった…常連さんでしかもあるじの高校の同級生。あるじ夫婦は懸命に私に目で合図を送っていたのだが、鈍感な私には通じなかったというお粗末な一席であった。ちなみに一部始終を目撃した東京人の若手PIは、その後大阪は恐ろしい恐ろしいとトラウマになっている様子だったが、別に恐ろしいことはなくて、これが縁でその人ともその後はしばしば親しく飲ませて頂いている。ただこの方酔うと身体接触型コミュニケーションをはかるうとする傾向があり、私はほっぺたの肉を引っぱられたりしている。もちろんされるがままである。あ、これ読んでたらごめんなさい。引っぱられて嬉しいです。(後日譚。大昔少し縁があったがその後研究をやめた京都の学生さんが、今はこのおばはん、もといお姉様、と同じ職場に居ることが判明し、この店で何十年ぶりに再会した。世の中は居酒屋で通じ合っている。)



追記:

- 1) ケロリンは内外製薬の鎮痛剤で、そのパッケージも相当くるものがある。桶も薬のパッケージもファンが多いらしく、ケロリンファン倶楽部の存在を発見。http://www.naigai-ph.co.jp/special/fanclub/ここで桶の実物やキーホルダーが買える。
- 2) ラストサムライで渡辺演じる勝元は、「すべてパーフェクトだ」という言葉を遺して死ぬ。
- 3) かつて大阪に巨大アヒルがいた。水都大阪2009のイベントのひとつアヒルプロジェクト2009として一ヶ月ほど展示されていた。大阪の不動産会社が、オランダのアーティスト、フロレンティン・ホフマン氏に制作を依頼した。つまり芸術作品である。正式名称ラバーダック。空気で膨らませるので萎んだこともあったらしい。これだけでかいとシュールで、インパクトもすごい。ちょっと怖い気もする。私は、ウディアレンの怪作「セックスの全て」(正式名称は、Everything you always wanted know about sex)に出てくる巨大おっぱい(やはり風船状で人を襲う)を思いだした。大きな反響を呼び、人気だったがプロジェクトが終了し撤収されてしまった。しかし2011年に、東北震災被災地支援金募集のため1週間限定で復活した。これが永久展示され、太陽の塔、ビリケン、グリコ、かに道楽のカニと並ぶ大阪のシンボルのひとつとなることを願っているのは私だけではなくろう。ちなみに私はこれを講演の冒頭のスライドでいつも紹介している。外国では、I loved it and I missed itという、とても受ける。本題とは関係無いと言うとさらに受ける。外人は箸が転んでも笑うなあ。
- 4) Retraction. 前号で「庄野真代が昔歌っていた国出身の女性研究者に走っているのを目撃され、すごく遅かったと言われた。」という内容の文を書いたところ、ご本人から遅かったというのは遅い時刻だったという意味だご指摘がありました。お詫び申し上げますと共にここに謹んで訂正いたします。(なんでばれたんやろ。読者層が拡大しているのか…)
- 5) Prof.A.Hill Returnsが届かないと食事喉を通らない、とか、これを読むと食事が不味くなってダイエットによい等と言った励ましのお言葉はFacebookでどうぞ。A.Hillじゃなくて実名で検索して下さい(実名をご存じでない場合は周りの人に聞いて下さい)。ニュースレター見ました、と書いて頂ければ知らない方でも自動的に友達承認します。

